

〔資料〕

宮島コレクション所蔵 無言大願 『弘法大師和讃文』 翻刻と解題

寺津 麻理絵・関口 静雄

「解題1」大願と『弘法大師和讃文』

『弘法大師和讃文』は、その奥書から嘉永五年（一八五二）一月に会津沙門麟浄寛順が印施せんと発願し、京都六角堂頂法寺能満院住持の真言僧で画僧として活躍した無言大願が製作し開版したものと知られる。

無言大願の足跡は、平成十六年に京都市立芸術大学芸術資料館が編纂した『仏教図像聚成―六角堂能満院仏画粉本』が刊行され、また平成二十三年に大願ゆかりの会津若松の自在院住職阿住義彦師が『六角堂能満院「大願」―林岳房憲海「大成房憲理」の足跡』を上梓されて世に知られるようになった。しかし大願の足跡はまだまだ埋もれたままのものが無数に存在するように思われる。このたび翻刻紹介する宮島コレクション蔵『弘法大師和讃文』もその一つであり、同コレクション所蔵『光明真言功德曼荼羅』（木版、一八三五年）と同じく、大願が掲げていた印施千種の一つを埋める作例である。無言大願は寛政十年（一七九八）会津安積郡赤津に生まれ、大和長谷寺で事相・教相の修業を積み、天保三年（一八三二）三月、正法律を提唱した慈雲飲光の系譜を引く河内長栄寺の黙住信正により進具した。長谷寺下山後は修学の間諸山名刹を巡遊して聖教・古文書・仏画の書写収集に取り組んだ。一時会津藩公祈願所八角神社別当寺亀福院に寓居した後、弟子の大成とともに再び上京し、能満院工房の整備に努めたが、元治元年（一八六四）七月の禁門の変で焼失し、蓮光院に避難直後の九月に遷化した。幕末という不安定な時代が大願の行業を埋もれさせてしまったのである。

『弘法大師和讃文』は、弘法大師の事績をいろは四十八文字にしたがって、和讃の定型である七五調四句を積み重ねて謳い上げたものであるが、自ら巻末に記しているように、大願はこれを世に流布していた弘法大師に

まつわる諸讃文や要文を撰取して一文に製したのであって、ここに大願が既存のものを尊重しながらも、依頼に応じて柔軟に対応する能力の持ち主であり、また字僧として深い見識を有していたことを知るのである。

印施発願主の「京智嶺会津沙門／麟浄寛順」は、阿住師が能満院仏画粉本墨書データから会津関連事項を抽出された中に、

◎「空海 覚鑿 寛全像」

嘉永二己酉八月廿九日校合之「寛全法印様ノ御弟子ノ浄麟法印様御詔ノ会津若松南町文明寺ノ天保十四年癸卯八月廿二日御年七十ノ像ノ大阿闍梨法印寛全

とあって、大願が会津若松南町文明寺（明治初期に廃寺）の寛全法印像を、寛全師の弟子「浄麟法印」の依頼によって製作したことが知られる。「京智嶺会津沙門／麟浄寛順」は、あるいは「浄麟法印」のことではなからうかと思う。

底本とした宮島コレクション蔵『弘法大師和讃文』は袋綴装、縦一六一mm・横一五一mmの小冊。解体して汚れを落とし、見開きの画像を掲出した。翻刻にあたっては底本の字体表記を尊重したが、譜記号類は割愛した。翻刻文作成に井上涼香（日本語・日本文学科一年）・金藤あすか（歴史文化学科一年）・柳川亜美（同）三嬢の協力をいただいた。御礼申し上げます。



京都・弘仁山蓮光院

（寺津麻理絵）

〔解題2〕十六才宗立画

六角堂能満院が出した「寶相惠喜神・寶相寛童神」の御影ふだがある。画面下に「京都六角堂能満院」、その左上に「十六才宗立画」と刻まれている、これが六角堂能満院仏画工房を主宰した無言大願の膝下にあった田村宗立の作と知れる。二神の御影に添えて利益縁起が記されている。

寶相惠喜神 ○ 六日 十三日 二十日 廿七日

抑く虚空藏大菩薩ハ源ト南方寶相如來福智圓滿ノ正法輪身ニマシマシテ往昔大悲ノ誓願力ニヨツテ和光同塵ノ三昧ニ住シテ阿和志摩大明神ト現ジ玉フ是レ則チ本朝神仙醫藥之祖神ト少彦名ノ尊同體ノ神靈ナリ或ハ湯泉權現トアラハレ諸國ニ溫泉ヲ涌出シ諸人ノ病苦ヲ除キ玉ヒ又ハ世間流行ノ寶相七神ヲ眷屬トシ諸人ノ痲瘡安全ヲ守護シ玉ヘリ

寶相寛童神 ○ 三日 十日 十七日 廿四日

木版 二七〇×一八五mm



二神の御影を中央に描き、その左右両端に神名とその縁日を記し、上部には両端の二神名に挟まれるように利益縁起を説き、下部には「京都六角堂能満院」の寺名と、その左上に「十六才宗立画」と画工の名を刻んでいる。左端の寶相寛童神の読みを左に付するなど、素人眼にも調和のとれた穏やかな絵相であると思われる。浅学にして利益縁起の出扱を知らぬが、あるいは十六才の画工宗立の創案かとも思われる。

西国観音霊場第十八番天台宗紫雲山頂法寺の寺内塔頭の一つであった真言宗智山末の能満院は、『京都名所図絵』に頂法寺本堂の向かって左奥に描かれていることから、安住義彦師が「観音霊場参拝者との交流が有ったことも推測できる」と指摘されたように、おそらく「寶相惠喜神・寶相寛童神」の御影ふだも霊場参拝者に頒布されたものと思われる。他にも能満院仏画工房が頒布したであろう「おふだ」類も宮島コレクション蔵資料に数点確認できる。

田村宗立（一八四六〜一九一八）は丹波国船井郡園部の人で、十方・十方明・有安乞士・月樵などと号した仏画僧であるが、一般には京都洋画壇の発展に貢献した人物として知られる。そうした視点から宗立の略歴を一瞥すると、幼児より絵筆を執ったといい、安政二年（一八五五）十歳の時、京都東山の大雅堂清亮の画塾で南画を習い、翌三年能満院大願のもとで得度し仏画を学んだ。同五年仏画とは逆に実物そのままに描く絵があるのを知り陰影法を独学し始め、文久元年（一八八六）頃から写真に啓発されて陰影を工夫し日本画とも西洋画ともつかない絵に熱中した。明治四年（一八七二）二十六歳の時、欧学舎支舎英学校に入学し英語と油絵を学び、翌五年栗田口病院に通訳兼画工として雇用され、ドイツ人医師ランゲックに油絵の手ほどきを受けた。さらに同八年横浜に出てチャールズ・ワグマンに教えを乞い、一年ほどで京都に戻ると洋画研究に没頭した。同十年第一回内国勸業博覧会に「下賀茂社頭図」を出品し褒状を受け、同十三年第九回京都博覧会に「茶摘之図」（油絵）を出品し褒状を受けた。同十四年京都府画学校の西宗（西洋画科）教員に任じられると、折からの洋画流行の風潮を受けて宗立の教室には生徒がひしめいたという。しかし同二十年ころから洋画排斥運動が起こり、同二十二年祇園下河原月見町に設立した

画塾明治画学館も翌二十三年に閉校した。その後、同三十四年関西美術会に参加し、同三十六年五十六歳の時、関西美術会第三回総会において多年の功績を表彰され、同三十九年浅井忠が主導して設立された関西美術院に加わった。

宗立は五十歳ごろから油絵を描かず、晩年は知恩院山内光玄院に住し、もっぱら日本画を描いて余生を過ごした。大正七年（一九一八）七月十日没。享年七十三。師大願の眠る姉小路大宮西入姉西町の高野山真言宗弘仁山蓮光院墓所に葬られた。法名、恣徳院仙翁宗立居士。蓮光院は元治元年（二八六四）七月の禁門の変によって頂法寺と寺内塔頭諸院が焼失した折り、能満院一同とともに移り住んだ懐かしい仏画工房跡だった。墓は後に東山の建仁寺に改葬され、大方丈後庭に生前愛用の大硯が田村月樵碑として建立された。

宗立は京都に在って洋画という未知の分野をただ独りで切り拓いた孤高の画家であった。京都の洋画史に果した功績は大きい、十分に評価されているとは云い難い。掲出した「寶相惠喜神・寶相寛童神」の御影ふだは宗立十六歳の作品である。東福寺塔頭毘沙門堂勝林寺に所蔵される「毘沙門天曼荼羅」の版木も宗立十六歳の作だという。洋画史研究の視点からすれば陰影法に熱中していた時期であるが、仏画僧としても優れた作品を製作していたのである。明治三年に開版された『御室版高雄曼荼羅』の事業推進集団の中には、大願門下の大成・十方明らの名が見える。十方明は宗立の別号である。京都市立芸術大学芸術資料館には、宗立の遺族から寄贈された仏画の粉本が大量に所蔵されており、大阪府豊中市緑丘の豊中不動寺の「田村月樵（宗立）コレクション」³⁾には晋任第一世坂井榮信師が蒐集された宗立の仏画作品が多く含まれている。師大願と同じく蓮光院に葬られたことからしても、宗立が晩年まで六角堂能満院仏画工房の同人たちと交遊を失っていなかったことは明らかである。「寶相惠喜神・寶相寛童神」の御影ふだは、宗立が仏画僧として非凡な才能の持ち主であったことを示しているように思われる。

注

1. 阿任義彦師「自在院史料集第二集 六角堂能満院「大願」―「林岳房憲海」「大成房憲理」の足跡」(平成十八年五月、真言宗豊山派自在院)
2. 寺津麻理絵「光明真言功德曼荼羅」(一枚摺の世界―その小釈の試み(2))「学苑 八八一号 平成二十六年三月」
3. 児玉義隆編『榮信和尚遺稿遺墨集』(昭和五十五年十一月、豊中不動寺)

付記

会津自在院住職阿任義彦師・紫苑山豊中不動寺住職谷真光師・同副住職新宅弘典師・星野画廊主星野桂三氏には大切なお教えと御親切を頂戴した。御礼申上げる。

(関口静雄)

無言大願「光明真言功德曼荼羅」

木版 五〇一×二七一mm





御和讃を拝せんと思ふ時は先ッ身を清め
 手をあらる口をすゝぎ三度頂だいして
 開くべし尤盤の上に直に置べからず
 浄器を以て直し帟を以敷べきなり

先ッ懺悔の文 善賢の願贊
オハの偈なり

「表紙見返

弘法大師和讃文
 施印

「表紙

付頭(甲)

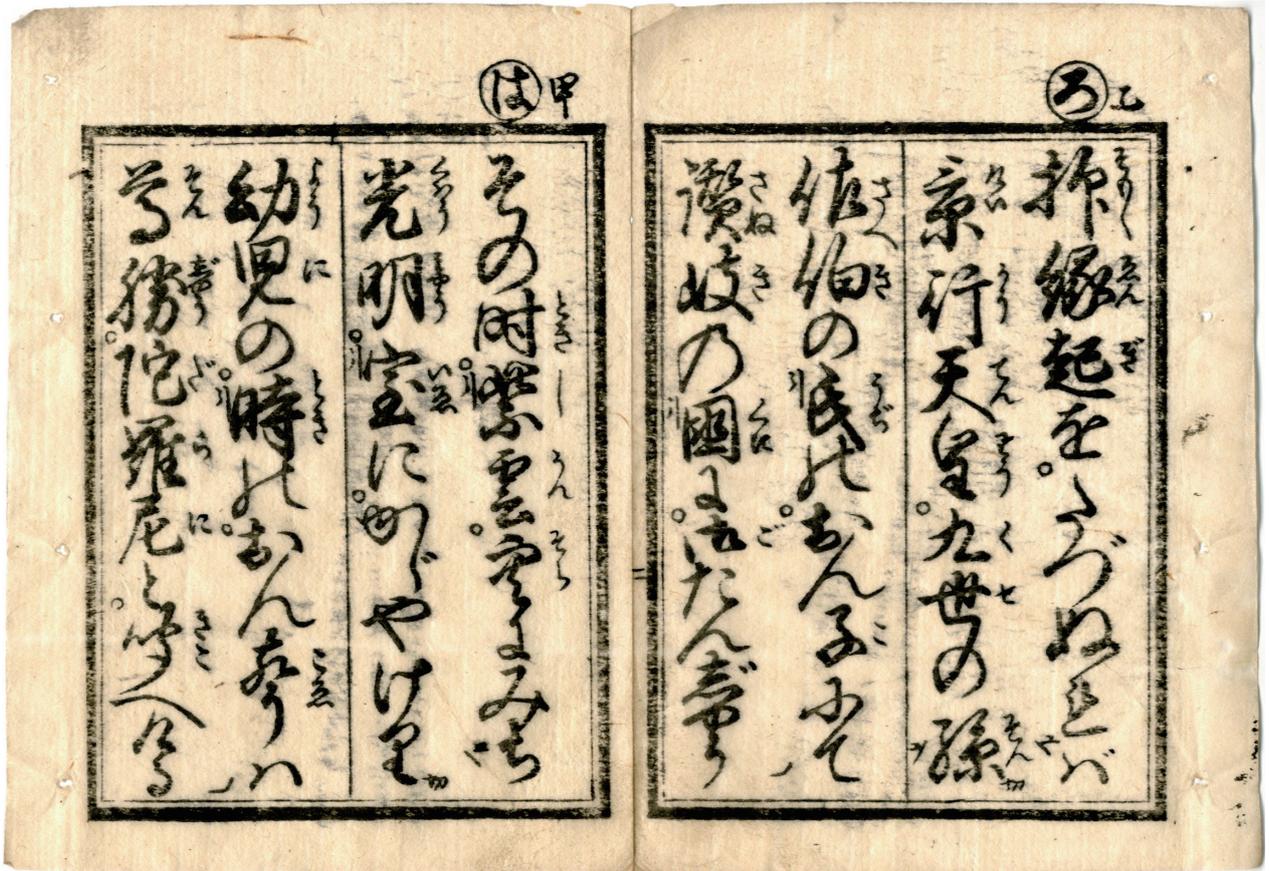
海 乃 門 出 給 ふ	花 臺 の 樂 を 打 捨 て	大 悲 利 生 の 本 誓 に	歸 命 頂 禮 遍 照 尊
----------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------

一 切 我 今 皆 懺 悔	從 身 語 意 之 所 生	皆 由 無 始 貪 瞋 癡	我 昔 所 造 諸 惡 業
---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------

付頭(甲)

濟 度 の 門 に 出 給 ふ	花 臺 の 樂 を 打 捨 て	大 悲 利 生 の 本 誓 に	歸 命 頂 禮 遍 照 尊
--------------------------------------	--------------------------------------	--------------------------------------	---------------------------------

一 切 我 今 皆 懺 悔	從 身 語 意 之 所 生	皆 由 無 始 貪 瞋 癡	我 昔 所 造 諸 惡 業
---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------	---------------------------------



①甲

その時紫雲空にみち
光明室にかぐやけり
幼児の時のおん聲は
尊勝陀羅尼と聞へける

②乙

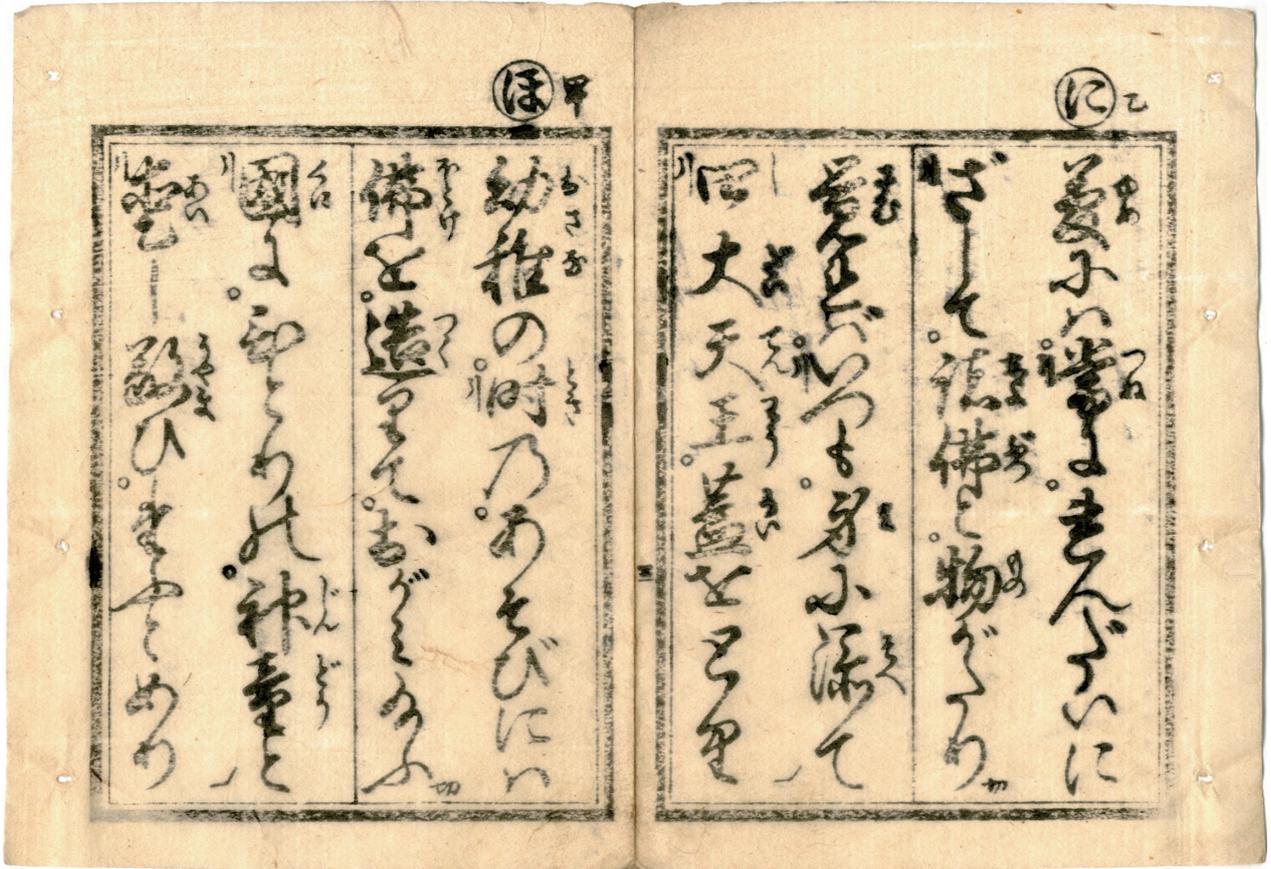
抑縁起をたづぬれば
景行天皇九世の孫
佐伯の氏のおん子にて
讃岐の國に御たんじやう

①甲

その時紫雲空にみち 光明室にかぐやけり	幼児の時のおん聲は 尊勝陀羅尼と聞へける
------------------------	-------------------------

②乙

抑縁起をたづぬれば 景行天皇九世の孫	佐伯の氏のおん子にて 讃岐の國に御たんじやう
-----------------------	---------------------------



ほ甲

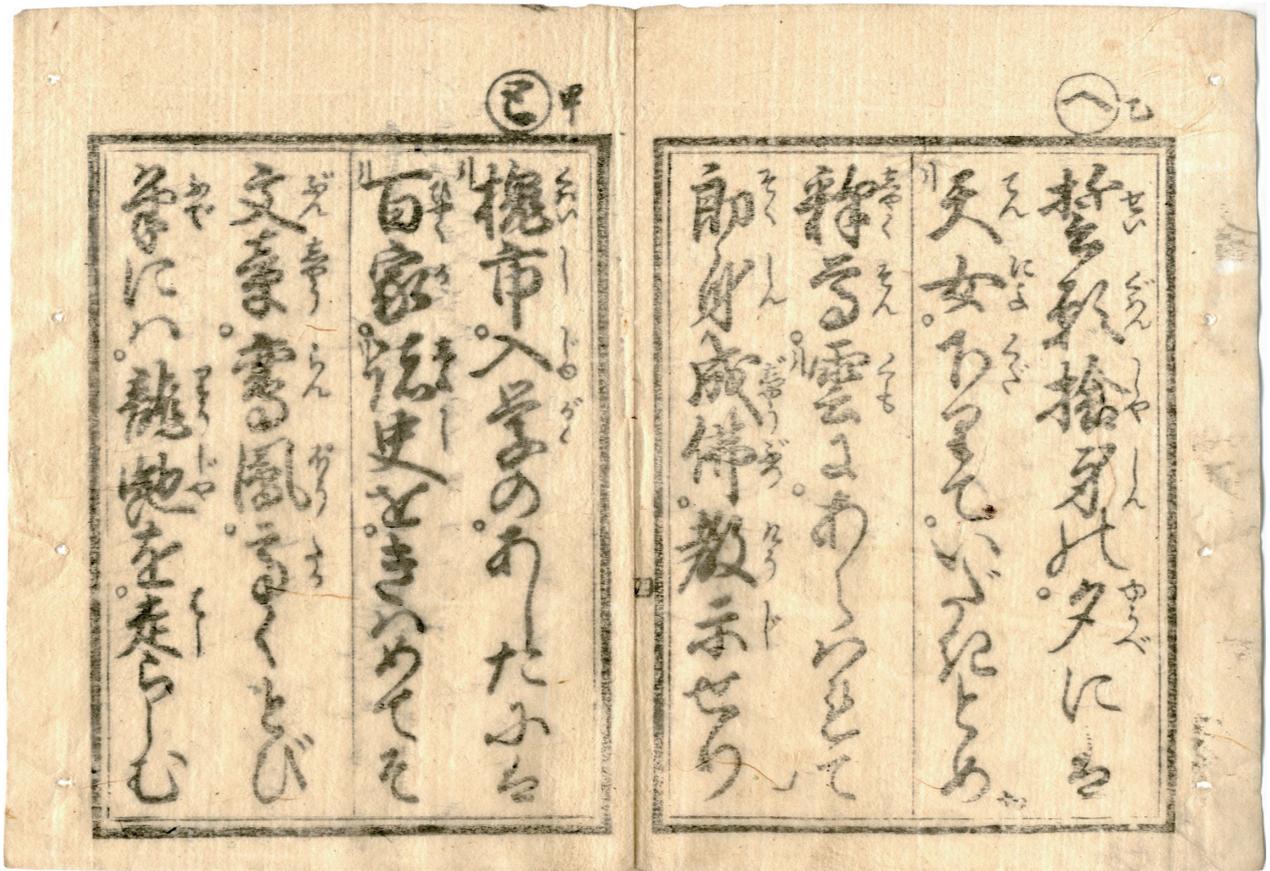
<p>幼稚<small>おさな</small>の時<small>とき</small>乃<small>なり</small>あそびに 佛<small>ほとけ</small>を造<small>つく</small>りておがみ給<small>たま</small>ふ</p>	<p>國<small>くに</small>にひとり<small>ひと</small>りの神童<small>じんどう</small>と 愛<small>あい</small>し敬<small>うやま</small>ひたふとめり</p>
---	---

「03ウ

ほ乙

<p>覺<small>さむ</small>ればいつも身<small>み</small>に添<small>そへ</small>て 四<small>し</small>大<small>だい</small>天<small>てん</small>王<small>わう</small>蓋<small>がい</small>をとり</p>	<p>夢<small>ゆめ</small>には常<small>つね</small>にれんだいに ざして諸佛<small>しよぶつ</small>と物<small>もの</small>がたり</p>
--	--

「03オ



㊦甲

<p>槐市入学のあしたには 百家諸史をきはめてそ</p>	<p>文章鸞鳳高くとび 筆には龍蛇を走らしむ</p>
---	---

「04ウ

㊦乙

<p>誓願捨身の夕には 天女下りていだきとめ</p>	<p>釋尊雲にあらはれて 即身成佛教示せり</p>
---	--

「四

「04オ

乙 ち

勤操僧都にしがひて	三乘五乘の教をきき
後には不二の理をたづね	諸佛に祈請を申し立

五

甲 じ

夢中の告をかふむりて	大和の久米の大塔に
傳來秘蔵のおん經を	此時感得あそばして

乙 ち

勤操僧都にしがひて	三乘五乘の教をきき
後には不二の理をたづね	諸佛に祈請を申し立

五

甲 じ

夢中の告をかふむりて	大和の久米の大塔に
傳來秘蔵のおん經を	此時感得あそばして

05ウ

05オ

乙 ぬ

入唐留学の御願より	長安青龍寺におゐて
真言ひみつの法門を	惠果阿闍梨のおん授け

乙 ぬ

入唐留学の御願より	長安青龍寺におゐて
真言ひみつの法門を	惠果阿闍梨のおん授け

甲 る

又ある時のゆうらん	大聖文珠の化現に
流水虚空に筆を投げ	たがへに神通ふしぎにぞ

甲 る

又ある時のゆうらん	大聖文珠の化現に
流水虚空に筆を投げ	たがへに神通ふしぎにぞ



甲

乙

如来にょらいの教法けうぽう奉行ぶぎやうして
 後佛ごぶつの出世しゅっせに傳つたへよと
 教勅けうちやくあらたに蒙かふむりて
 程ほどなく唐土とうどにかへりて

七日七夜しちにちしちやのそのうちに
 白馬青羊飛車はくばせいようひしやにのり
 流沙りうさを涉わたりて靈鷲山りやうじゆせん
 聖衆しやうじゆの法座ほふざに礼拜らいはいし

甲

乙

如来にょらいの教法けうぽう奉行ぶぎやうして
 後佛ごぶつの出世しゅっせに傳つたへよと
 教勅けうちやくあらたに蒙かふむりて
 程ほどなく唐土とうどにかへりて

七日七夜しちにちしちやのそのうちに
 白馬青羊飛車はくばせいようひしやにのり
 流沙りうさを涉わたりて靈鷲山りやうじゆせん
 聖衆しやうじゆの法座ほふざに礼拜らいはいし

七

07ウ

07オ

乙 かい

帰朝の奏達ありければ
唐帝別離をおしませて
菩提子念珠を手づからに
朕が形見とたまはりて

甲 よ

最早なかばの年をこへ
今生かさねて値がたし
當來佛會にあふ事を
まつと流涙の恩勅に

乙 かい

帰朝の奏達ありければ
唐帝別離をおしませて
菩提子念珠を手づからに
朕が形見とたまはりて

甲 よ

最早なかばの年をこへ
今生かさねて値がたし
當來佛會にあふ事を
まつと流涙の恩勅に

八

た乙

大師拜受しの玉はく 形ちは世くにかはるとも	心は生く不變なり 叡慮うたがふ事なかれ
--------------------------	------------------------

れ甲

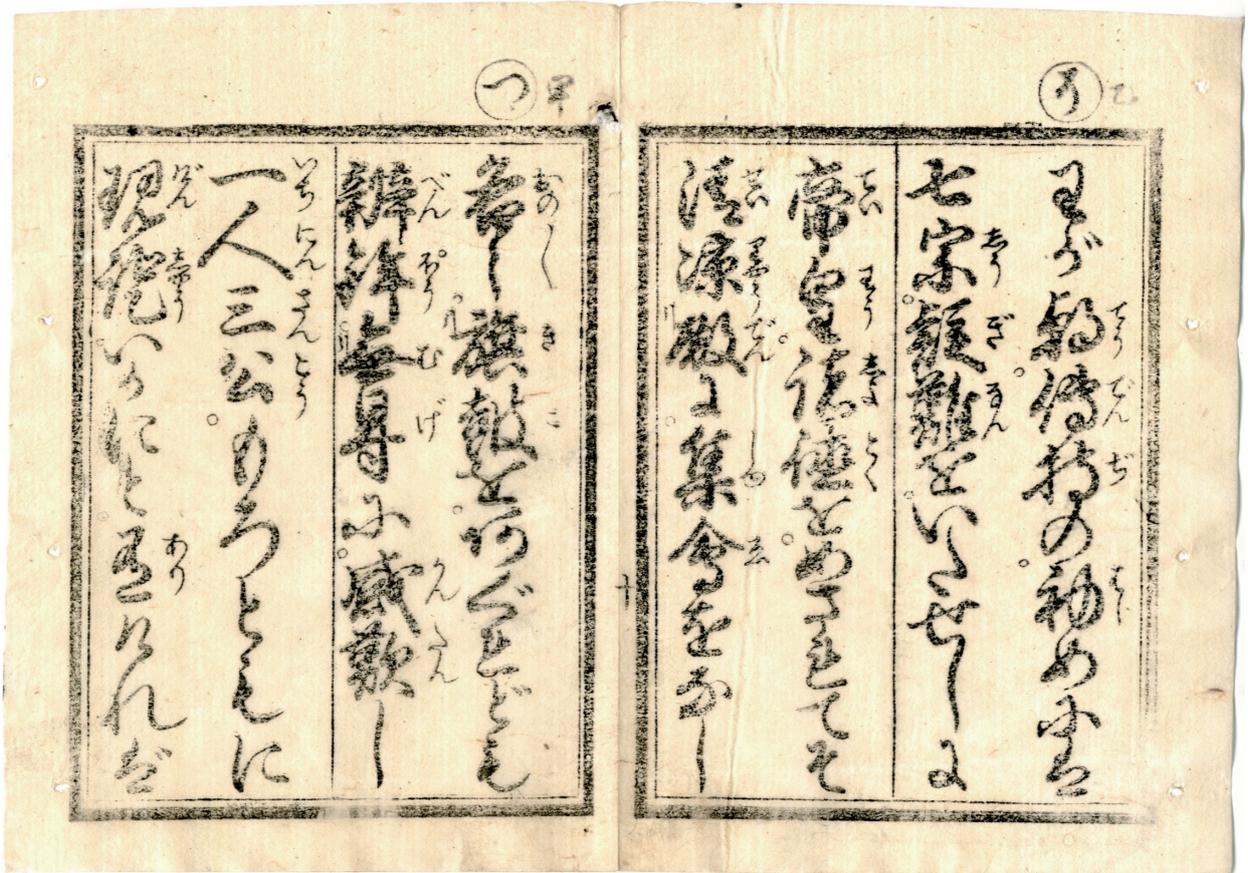
はや明州の津にいたり 濱よりなぐる三鈷杵は	雲にうかんで光明登 共に東へ飛びさりぬ
--------------------------	------------------------

た乙

大師拜受しの玉はく 形ちは世くにかはるとも	心は生く不變なり 叡慮うたがふ事なかれ
--------------------------	------------------------

れ甲

はや明州の津にいたり 濱よりなぐる三鈷杵は	雲にうかんで光明登 共に東へ飛びさりぬ
--------------------------	------------------------



ろ

わが朝傳持の初めには
 七宗疑難をいたせしに
 帝皇諸徳をめぐりてそ
 清凉殿に集會をなし

つ

各々旗鼓をあぐれども
 辨鋒無尋に感歎し
 一人三公もろともに
 現證いかにと有ければ

ろ乙

わが朝傳持の初めには
 七宗疑難をいたせしに
 帝皇諸徳をめぐりてそ
 清凉殿に集會をなし

十

つ甲

各々旗鼓をあぐれども
 辨鋒無尋に感歎し
 一人三公もろともに
 現證いかにと有ければ

10ウ

10オ

ね乙

即身成佛是なりと	大日如來とあらはれて
五智の寶冠こんれんげ	金色身相ゑんまんし

ね乙

即身成佛是なりと	大日如來とあらはれて
五智の寶冠こんれんげ	金色身相ゑんまんし

十一

11オ

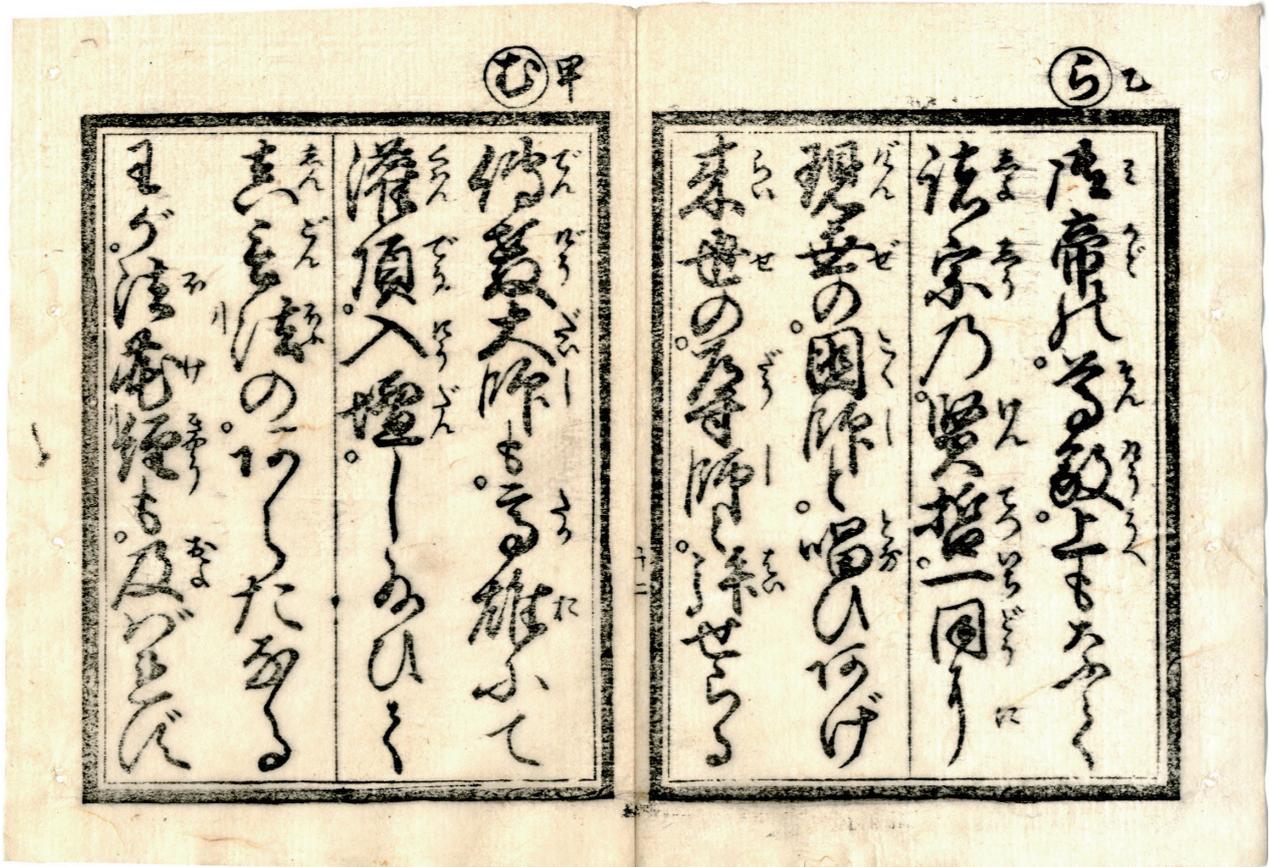
な甲

光明内外にかゞやけば	萬乘御榻をおり給ひ
その時禁裏の殿中に	たれか拜せぬ人もなし

な甲

光明内外にかゞやけば	萬乘御榻をおり給ひ
その時禁裏の殿中に	たれか拜せぬ人もなし

11ウ



①甲

傳教大師も高たか雄おにて
灌頂入壇し給ひて
真言法のあらたなる
わが法花經も及およばれず

②乙

諸宗の賢哲一同耳
御帝の尊敬上もなく
現世の國師と唱となひあげ
來世の導師と拜はいせらる

①甲

傳教大師も高たか雄おにて
灌頂入壇し給ひて
真言法のあらたなる
わが法花經も及およばれず

12ウ

②乙

諸宗の賢哲一同耳
御帝の尊敬上もなく
現世の國師と唱となひあげ
來世の導師と拜はいせらる

十二

12オ



①甲

東寺は帝の御建立
鎮護國家の寺なれば
教王護國と名附られ
永く大師にたまはりぬ

②乙

神通乘の法もんは
きけば聞程めづらしく
いかに況や餘教やと
深く讚歎せられたり

①甲

<p>東寺は帝の御建立 鎮護國家の寺なれば</p>	<p>教王護國と名附られ 永く大師にたまはりぬ</p>
-------------------------------	---------------------------------

②乙

<p>神通乘の法もんは きけば聞程めづらしく</p>	<p>いかに況や餘教やと 深く讚歎せられたり</p>
--------------------------------	--------------------------------

十三

13ウ

13オ



①甲

<p>一度参詣する人は 道にて三途の業めつし</p>	<p>すべて貴せん僧俗の 菩提寺とは云つたふ</p>
--------------------------------	--------------------------------

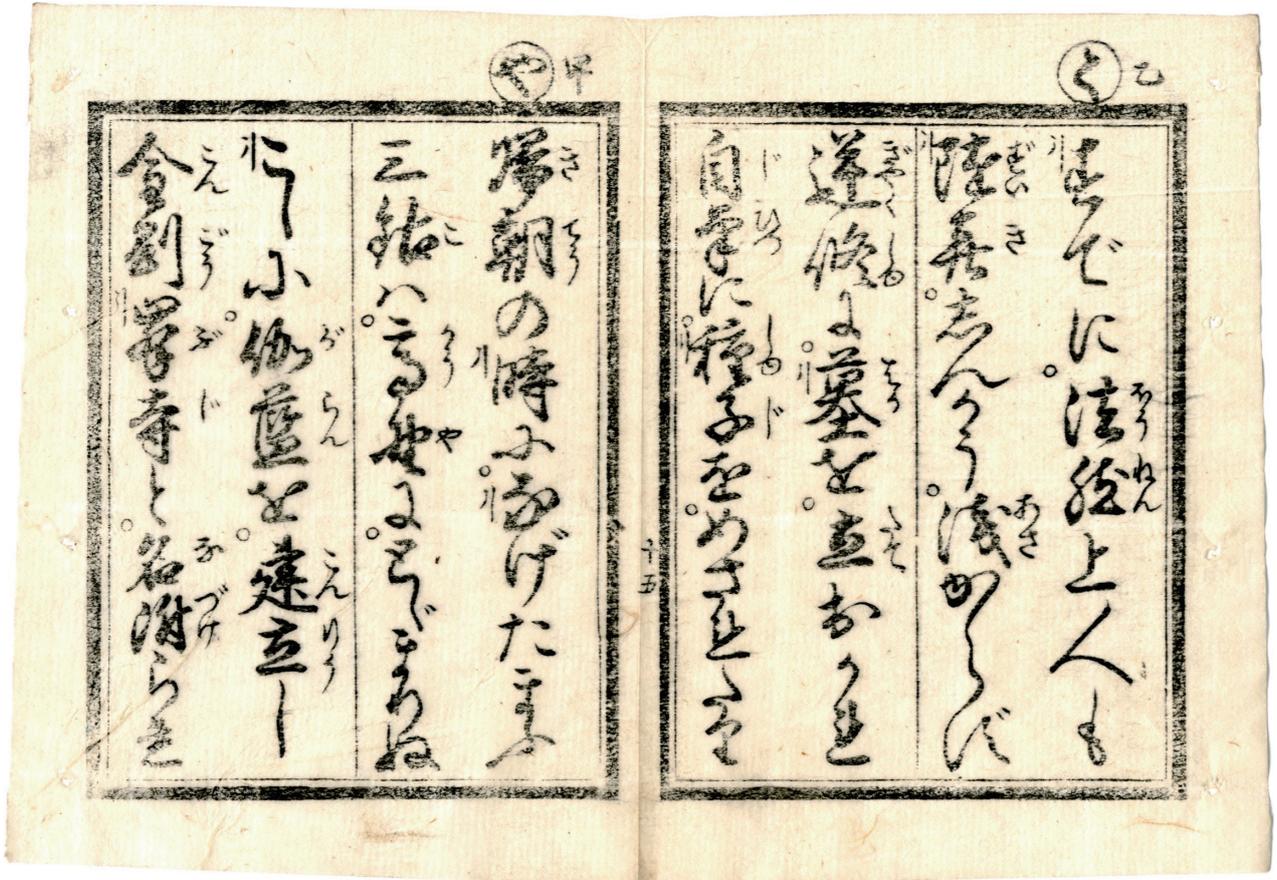
14ウ

②乙

<p>高野は雲上都そつ天 法身大師の浄土にて</p>	<p>常恒不壞の山なれば 佛天諸神の影向所</p>
--------------------------------	-------------------------------

14オ

14オ



乙

ほそでに法然上人も
 随喜しんかう浅からず
 逆修に墓を立おかれ
 自筆に種子をめされたり

十五

甲

帰朝の時になげたまふ
 三鈷は高野にとゞまりぬ
 こゝに伽藍を建立し
 金剛峯寺と名附られ

乙

すでに法然上人も
 随喜しんかう浅からず
 逆修に墓を立おかれ
 自筆に種子をめされたり

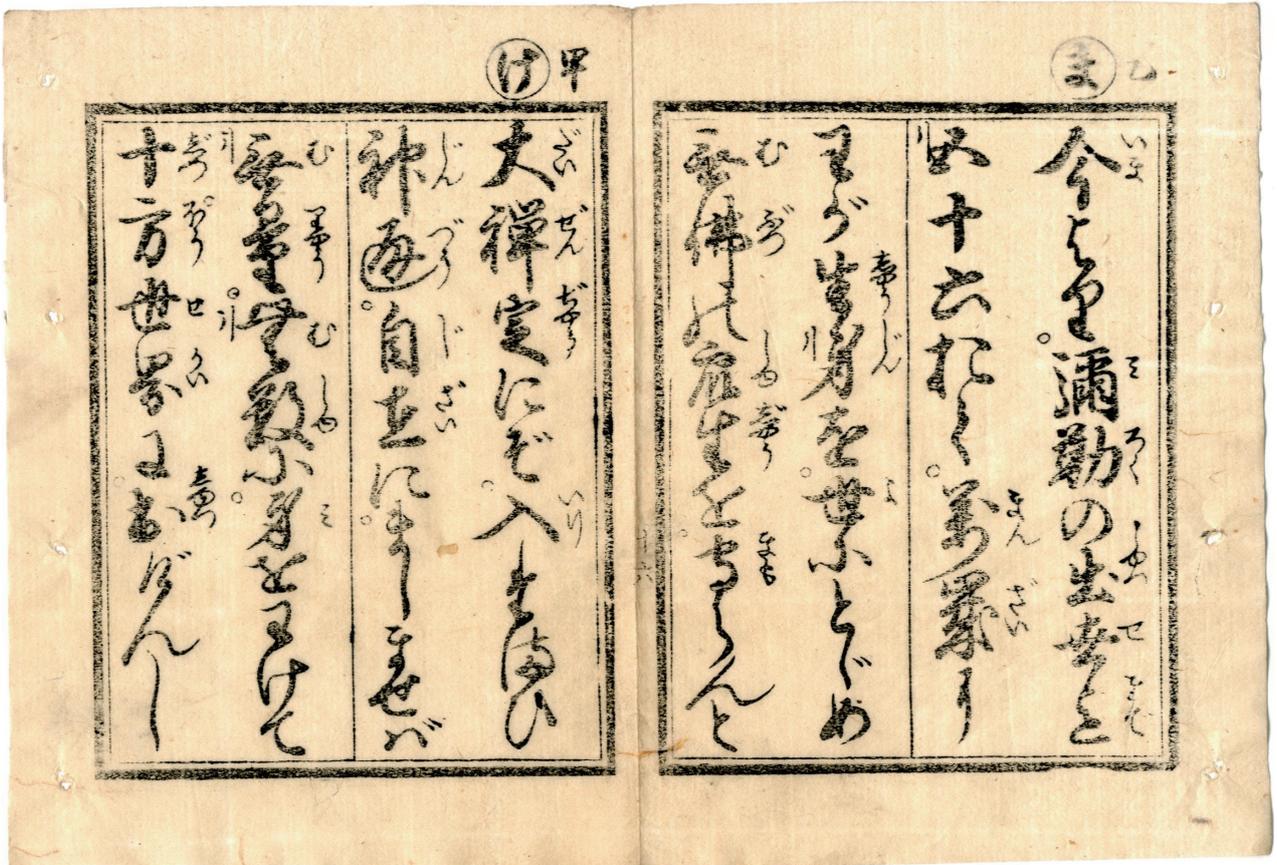
十五

甲

帰朝の時になげたまふ
 三鈷は高野にとゞまりぬ
 こゝに伽藍を建立し
 金剛峯寺と名附られ

15ウ

15オ



甲 (け)

大禪定にぞ入たまひ
 神通自在にましませば
 無量無数に身をわけて
 十方世界に出げんし

乙 (ま)

今より彌勒の出迄
 五十六おく萬歳に
 わが生身を世にとどめ
 無佛の衆生を守らんと

甲 (け)

大禪定にぞ入たまひ
 神通自在にましませば
 無量無数に身をわけて
 十方世界に出げんし

乙 (ま)

今より彌勒の出迄
 五十六おく萬歳に
 わが生身を世にとどめ
 無佛の衆生を守らんと

⑤乙

一切衆生をあらはれみて	無邊の利益を施され
水塩油のたぐるまで	その地に應じて出し給

②甲

國々所々にゆいせきの	靈佛寶器にいたる迄
永く世間につたはりて	衆生さいどの縁となる

⑤乙

一切衆生をあらはれみて	無邊の利益を施され
水塩油のたぐるまで	その地に應じて出し給

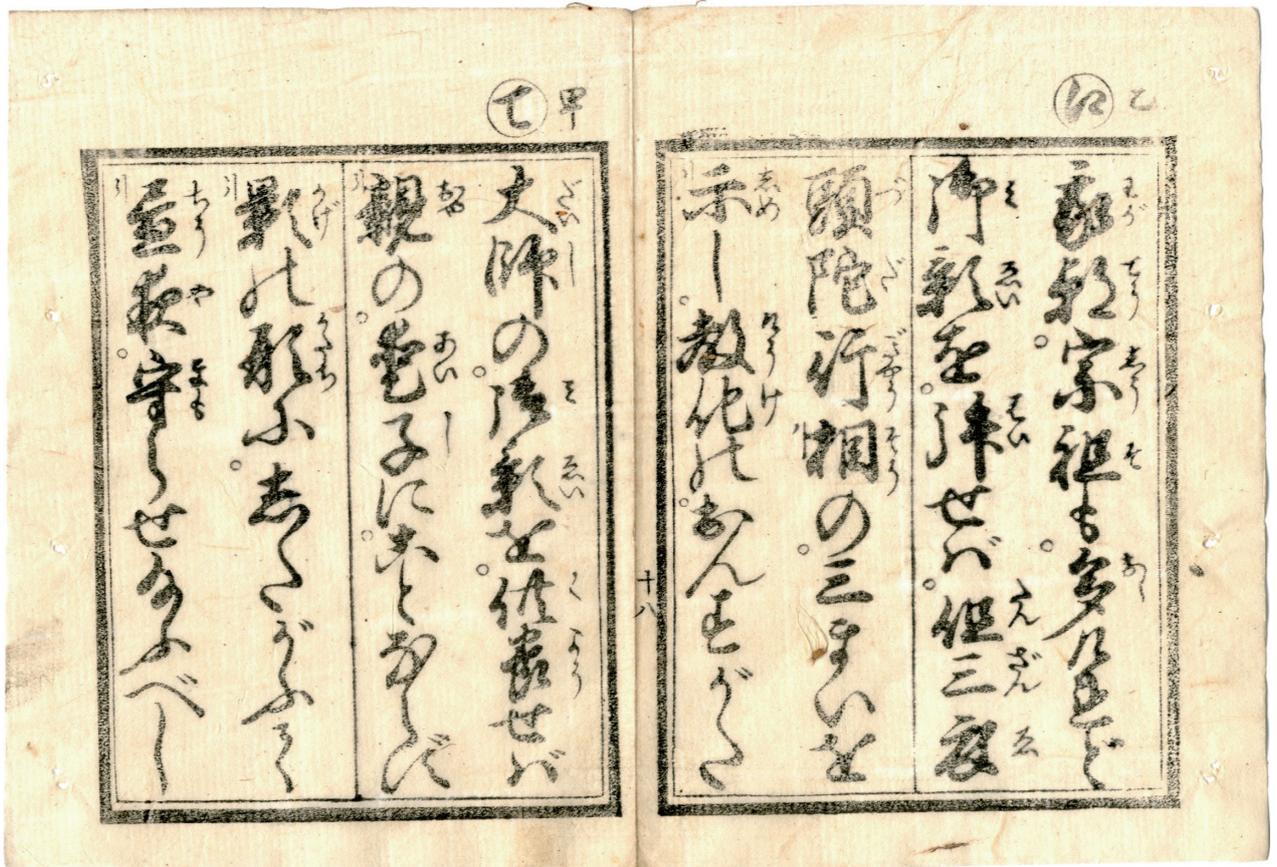
十七

17オ

②甲

國々所々にゆいせきの	靈佛寶器にいたる迄
永く世間につたはりて	衆生さいどの縁となる

17ウ



て甲

<p>大師の御影を供養せば 親の愛子にことならず</p>	<p>影の形にしたがふて 昼夜守らせ給ふべし</p>
----------------------------------	--------------------------------

18ウ

ね乙

<p>我朝宗祖も多けれど 御影を拜せば但三衣</p>	<p>頭陀行相の三まいを 示し教化のおんすがた</p>
--------------------------------	---------------------------------

18

18オ



乙

其感應こそ身にそみて
 やどら世給ふおすがたに
 あくじさい難まぬかれて
 一生福寿をあたひられ

甲

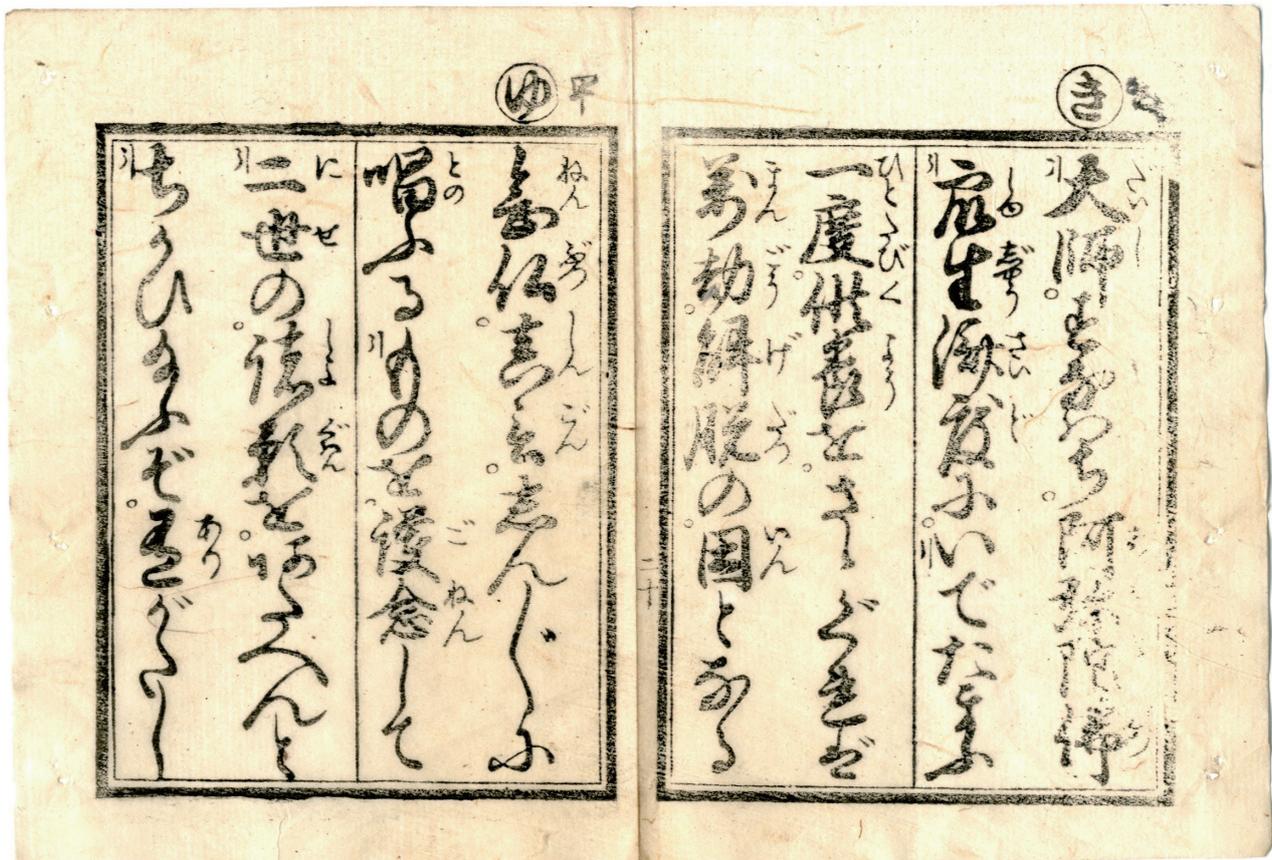
平等大智の大悲願
 臨終日げん告をうけ
 来世は浄土へ引導す
 其ためしこそ世に多し

乙

其その感應かんのうこそ身みにそみて
 やどら世せ給ふおすがたに
 あくじさい難なんまぬかれて
 一生福寿いっしやうふくじゆをあたひられ

甲

平等大智びやうどうだいちの大悲願たいひくはん
 臨終日りんじうにちげん告つげをうけ
 来世らいせは浄土じやうどへ引導いんだうす
 其そのためしこそ世よに多おし



①き

大師だいしをあち阿あ彌み陀だ佛ぶつ
しゅじやうさいど衆しゅ生じやう濟さい度どにいでたまふ
ひとたびくよう一ひと度たび供く養ようをさぐれば
まんごうげだつ萬まん劫ごう解げ脫だつのいん因いんとなる

②ゆ

ねんぶつしんごん念ねん仏ぶつ真しん言ごんしんごんぐんに
と唱とふるものをごねん護ご念ねんして
にせ二に世せのしよくほん諸しよ願くほんをあたへんと
ありちかひ給ふぞ有ありがたし

①乙

大師だいしすなはち阿あ彌み陀だ佛ぶつ
しゅじやうさいど衆しゅ生じやう濟さい度どにいでたまふ
ひとたびくよう一ひと度たび供く養ようをさぐれば
まんごうげだつ萬まん劫ごう解げ脫だつのいん因いんとなる

②甲

ねんぶつしんごん念ねん仏ぶつ真しん言ごんしんごんぐんに
と唱とふるものをごねん護ご念ねんして
にせ二に世せのしよくほん諸しよ願くほんをあたへんと
ありちかひ給ふぞ有ありがたし

二十

「 20ウ

「 20オ



⑥甲

我々も人も法ともいふ
 大師の御恩を仰ぐべし
 延喜の帝のおんときに
 弘法大師とおくりなす

⑥乙

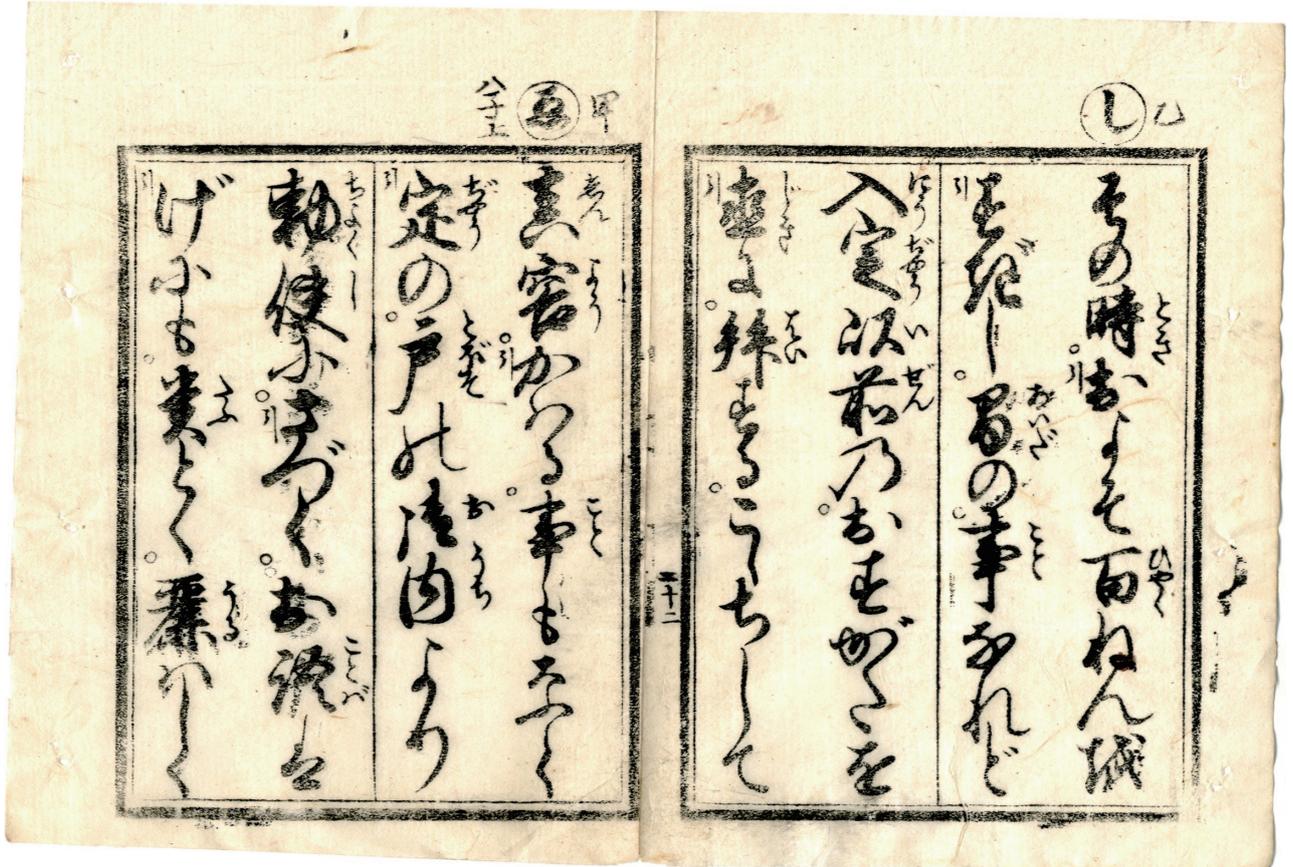
いかなる過去の宿善ぞ
 このたび大師を拜するは
 孝子の父母に尋ねある
 渡りに船をうるごとく

⑥甲

われらも人も諸ともに
 大師の御恩を仰ぐべし
 延喜の帝のおんときに
 弘法大師とおくりなす

⑥乙

いかなる過去の宿善ぞ
 このたび大師を拜するは
 孝子の父母に尋ねある
 渡りに船をうるごとく



①し

その時およそ百ねん城
 王死しるの事なれど
 入定以前のおすがたを
 直に拜するこゝちして

②あ

真容かはる事もなく
 定の戸れ御内より
 勅使にさづくお語は
 げにも貴とく麗はしく

①乙

その時およそ百ねんを
 すぎし間の事なれど
 入定以前のおすがたを
 直に拜するこゝちして

②甲

真容かはる事もなく
 定の戸の御内より
 勅使にさづくお語は
 げにも貴とく麗はしく

二二二

ひ

御帝を初め世の人 につせう感ぜぬ者もあ 毎 年 法 衣 を し ん ぜ ら れ 諸 宗 の 導 師 と 仰 ぎ け る	伏見の院乃御とき 国家豊樂の祈願には 仁王般若を 書写あれと 告し仰もあらたなり
--	--

二十三

も

御帝を初め世の人 につせう感ぜぬ者もあ 毎 年 法 衣 を し ん ぜ ら れ 諸 宗 の 導 師 と 仰 ぎ け る	伏見の院乃御とき 国家豊樂の祈願には 仁王般若を 書写あれと 告し仰もあらたなり
--	--

乙

御帝を初め世の人に たれか感ぜぬ者もなし	毎年御衣をしんぜられ 諸宗の導師と仰ぎける
-------------------------	--------------------------

二十三

甲

伏見の院の御ときに 国家豊樂の祈願には	仁王般若を 書写あれと 告し仰もあらたなり
------------------------	-----------------------------

23ウ

23オ

⑨ 乙

聖徳太子 <small>しやうとくたいし</small> よりのちの 神道儒佛 <small>しんたうじゆぶつ</small> の祖師 <small>そし</small> と聞 <small>きく</small>	いろはの假名 <small>かな</small> の文字 <small>もじ</small> 迄 <small>まで</small> も 廣く <small>ひろ</small> おしへをなし給ふ
---	---

二十四

⑩ 甲

聖徳太子 <small>しやうとくたいし</small> よりのちのちの 神道儒佛 <small>しんたうじゆぶつ</small> の祖師 <small>そし</small> と聞 <small>きく</small>	いろはの假名 <small>かな</small> の文字 <small>もじ</small> 迄 <small>まで</small> も 廣く <small>ひろ</small> おしへをなし給ふ
---	---

⑩ 甲

聖徳太子 <small>しやうとくたいし</small> よりのちの 神道儒佛 <small>しんたうじゆぶつ</small> の祖師 <small>そし</small> と聞 <small>きく</small>	いろはの假名 <small>かな</small> の文字 <small>もじ</small> 迄 <small>まで</small> も 廣く <small>ひろ</small> おしへをなし給ふ
---	---

⑨ 乙

聖徳太子 <small>しやうとくたいし</small> よりのちの 神道儒佛 <small>しんたうじゆぶつ</small> の祖師 <small>そし</small> と聞 <small>きく</small>	いろはの假名 <small>かな</small> の文字 <small>もじ</small> 迄 <small>まで</small> も 廣く <small>ひろ</small> おしへをなし給ふ
---	---

二十四

ㄥ 24ウ

ㄥ 24オ

微音 乙

若人求佛慧 通達菩提心
父母所生身 速證大覺位

生生世世

南無大師遍照金剛

值遇頂戴

三返

大師參詣日は毎月廿一日其外浴日茶湯日也
三年三月の間おこたらず信心参詣の人は諸願
心のまゝに叶ふべし且遠方にて参りがたき人は
住居方謹てあつく信じ影拜をすべき也
併感應の成否は信心の厚薄にしたがひ
利益の遲速は渴仰の淺深によるものなれば
信心の衆中は日參あるべきものなり

微音 乙

若人求佛慧 通達菩提心
父母所生身 速證大覺位

生生世世

南無大師遍照金剛 三返

值遇頂戴

二十五

大師參詣日は毎月廿一日其外浴日茶湯日也
三年三月の間おこたらず信心参詣の人は諸願
心のまゝに叶ふべし且遠方にて参りがたき人は
住居方謹てあつく信じ影拜をすべき也
併感應の成否は信心の厚薄にしたがひ
利益の遲速は渴仰の淺深によるものなれば
信心の衆中は日參あるべきものなり

25ウ

25オ

大師參詣日 毎月廿一日浴日 茶湯日

正月 五日 十六日	二月 七日 八日
三月 四日 十五日	四月 五日 廿五日
五月 十日 廿五日	六月 三日 十日
七月 五日 廿五日	八月 十日 十六日
九月 八日 十六日	十月 五日 十九日
十一月 六日 九日	十二月 十日 廿五日

二十六

右弘法大師御在香行状記並和讃歎
 世流布数本の内今且く需に應じ
 要文を取捨して甲乙四句の初毎に
 いろは四十八字を付して願くは
 阿弥陀如来六八大願の意にひとし
 からん事を仰ぎ偏に 高祖大師の
 報恩謝徳の志願なるものなり

大師參詣日 毎月廿一日 浴日 茶湯日

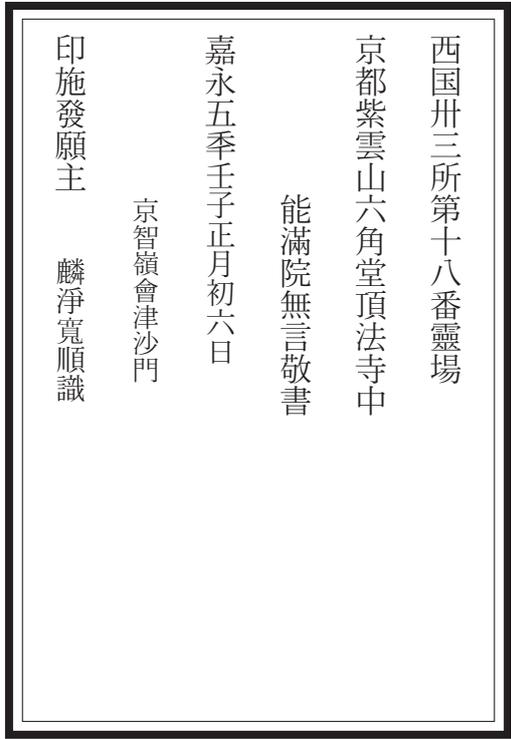
正月 五日 十六日	二月 七日 八日
三月 四日 十五日	四月 五日 廿五日
五月 十一日 十五日	六月 三日 十日
七月 十五日 廿四日	八月 十日 十八日
九月 八日 十一日	十月 十五日 十九日
十一月 六日 九日	十二月 十日 廿五日

二十六

右弘法大師御在香行状記並和讃歎
 世流布数本の内今且く需に應じ
 要文を取捨して甲乙四句の初毎に
 いろは四十八字を付して願くは
 阿弥陀如来六八大願の意にひとし
 からん事を仰ぎ偏に 高祖大師の
 報恩謝徳の志願なるものなり



西国卅三所第十八番靈場
 京都紫雲山六角堂頂法寺中
 能滿院無言敬書
 嘉永五季壬子正月初六日
 京智嶺會津沙門
 麟淨寛順識
 印施發願主



西国卅三所第十八番靈場
 京都紫雲山六角堂頂法寺中
 能滿院無言敬書
 嘉永五季壬子正月初六日
 京智嶺會津沙門
 麟淨寛順識
 印施發願主

「裏表紙見返

(てらつ まりえ
 (せきぐち しずお
 生活機構研究科生活文化研究専攻修了生)
 歴史文化学科)

「裏表紙